【第四〇回大会シンポジウム ユーラシアと日本列島 世界の中のアイヌ叙事詩】

本シンポジウムの狙い

丹菊 逸治
（シンポジウム・コーディネーター）

かつて金田一京助は古代ギリシアの『イーリアス』とアイヌ民族の「ユカラ」を並べて両者を同じく「叙事詩」と呼んだ。そのときの「世界三大叙事詩」などの呼び名は必ずしも学問的裏付けがあったとは言い難い。一方で『イーリアス』については古来より「口頭伝承か書記文学作品か」「作者は1人か複数世代にわたる伝承か」などの問題提起がなされてきたが、近年の研究成果によれば「口頭伝承の特徴がある」ことがほぼ明らかになった。現在では『イーリアス』と「ユカラ」を同じ「口承の長編物語」として並べること、つまり文芸ジャンルとして何らかの平行的な現象であると考えることも全く荒唐無稽とはいえなくなっている。中央アジアから北海道まで、つまりユーラシア大陸において広く「叙事詩と呼びならわされている長編物語」について「ジャンルとして並行的なものか否か」を考えることが可能になったのである。

それだけではない。「並行的なジャンル」というだけでなく、何らかの起源的な共通性、あるいは影響関係を考える研究もある。例えばヨーロッパ半島最西部のアーサー王叙事詩群とオセット叙事詩を関連付ける研究もデュメジル以来続いており、この方面についてはある程度の蓄積がある。ユーラシア中央部、つまりチュルク諸民族、モンゴル諸民族の叙事詩の研究も進展している。では、ユーラシア東部、つまりトゥングース諸民族からアムール・サハリン、さらに北海道にかけての叙事詩の相互の影響関係の可能性についてはどうなのか。

今回のシンポジウムでは、各地域で「叙事詩」と呼んでいるものが、各地域の口承文学においてどのような地位を占め、どのようなジャンル特性を有しているのか。地域を越えた共通性を有している可能性はあるのか。などを基本に立ち返って考えたうえで、アイヌ叙事詩との比較・関連を再検討する、という二段構えを狙った。ユーラシア全域およびトゥングース諸民族の叙事詩研究の立場から荻原眞子、チュルク叙事詩研究の立場から坂井弘紀、そしてアイヌ叙事詩研究の立場から奥田統己の3名のパネラーによる報告と、続いて日本古代文学研究の三浦佑之、モンゴル叙事詩研究の藤井真湖、ニヴフ叙事詩研究の丹菊逸治の3名のコメンテーターが参加、合計6名によるディスカッションという構成である。

事前に行われた打ち合わせにおいて、具体的なトピックとしては、

（1）各地域の叙事詩は、各地域の文学においてどのようなジャンル特性を有しているのか。内容的に、また形式的にどう異なるのか。
（2）隣接する叙事詩同士の影響関係の有無を考えることは可能か。同一民族内で複数の叙事詩が語られる場合の両者の関係（アイヌにおけるユカラとサコロペ、ハウキなど。あるいはカルマクにおけるゲセル叙事詩とジャンガル叙事詩）、複数の民族にまたがる同一の叙事詩の変化（例えばゲセル叙事詩のチベットとモンゴルでのバリエーション）などはどこまで分かっているのか。
（3）研究方法上の共通性はあるのか。例えば「歴史」史料としての研究、シャマニズムとの関係の研究、詩法研究などはそれぞれどこまで進展しているのか。それらの方法論や成果は相互に利用できる可能性があるのか。

などが考えられた。そういった問題意識を元に事前にある程度のメール交換が行われた。その結果、大会プログラムに掲載された奥田統己による「シンポジウム要旨」は以下のようなものとなった。

アイヌの英雄叙事詩については、知里真志保らによる「部落連合の総指揮者」という英雄像が広く知られてきた。しかしそうした像は、限られた地域のさらに一部の物語に基づいたものであって、実際にはアイヌの英雄像はより多様であり、地域によっても偏りを見せる。英雄の出自は人間であるとされることも神の子とされることもあり、幼な子である場合もすでに成人している場合もあるが、いずれにせよ成長や名声の獲得は物語の主題ではない。異集団との戦いや結婚はしばしば語られるにもかかわらず、その目的は集団の歴史的正統性の確認というより、むしろ神話的な事績の描写に近い。人格的成長をとげ神と人間あるいは人間どうしの新たな関係を構築して自らの安定と繁栄を追求するのは、むしろ散文説話や神謡といった英雄叙事詩以外のジャンルの主人公の使命となる。

こういった観点からみたとき、アイヌとユーラシアの叙事詩には、どのような共通点や相違点がみられるだろうか。歴史的な背景を意識し集団の団結をテーマとする叙事詩の英雄像は、アイヌの英雄像とはやはり大きく異なるのだろうか。物語の伝播の痕跡はそのなかから読み取れないだろうか。「英雄像」をキーワードにそれぞれのデータを持ち寄り、できるだけ尺度を揃えたうえでの比較検討を試みたい。

実際のシンポジウムでは、時間が限られていることもあり、全てのトピックを網羅的に取り上げることはもちろんできなかった。だが、チュルクからアイヌまで連続する広大なユーラシア叙事詩世界を俯瞰する試みとしてはある程度の意義があったものと考えている。

（たんぎく・いつじ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター）